



発行
南区人権尊重
啓発連絡会議

事務局
福岡市南区役所
生涯学習推進課
(☎559-5172)

第49回福岡市人権尊重週間(12月4日～10日) 人権を尊重する市民の集い(南区会場)

【演】「新しい家族のありかた 新しい歌をうたおう」

【講】講師 作家 鈴木 光司 さん

◎開催日 12月5日(土) ◎会場 南市民センター

参加者：201人

講演の要旨

今回の講演会は、「リング「らせん」の作者である作家の鈴木光司さんをお迎えしました。

男性の子育てが一般的でなかった時代に『主夫』として家事・育児をこなし、小説家の夢を諦めることなく、逆に子育てによって得られた喜びや経験が小説家としての成長につながったことなどを軽妙な語りで講演していただきました。

小説を書くきっかけ

小学校の担任から出された宿題は、400字詰め原稿用紙3枚分の日記で、僕は日記を書くことを友達と張り合っていました。平凡な日常生活の中で書くことがなく、空想の世界を描いた「7つの海の冒険旅行その1」という題名の物語を提出し、「作家の才能があ



「人と同じことはしない」と語る鈴木光司さん

みんな同じことをしない

高校時代は、バンドに夢中で、大人との出会いがありました。たばこを吸って

いる人が多く、僕もたばこを勧められました。僕も吸いませんでした。でも、その中で、どうすれば輪の中に入って主導的な立場をとれるのかを考えました。それは、「みんなと同じことはしない」、けれど「孤立はしない」ということです。これを守りながら輪の中に入って努力すれば、人間が磨かれ鍛えられると考えました。これは後々僕の人生に生きてきます。男でありながら、みんなの視線を気にせず子育てができたのも、この自分への戒律が影響していると思います。

小説家としての土台に

高校卒業後、アルバイトの合間に小説を多く読むようになり、小説家になる決心をしました。大学進学後、友達の下宿先のお寺を訪ねた時のことです。窓を開けると、墓石と墓石との間に井戸があります。即興で怖い話をつくりました。これを聞いた友達の反応から、怖い話は受けると思いました。これが小説家として進む土台となりました。

子育てが小説をレベルアップ

妻とは小学校5年生の時に出会い、何度もアピールをして結婚しました。婚姻当初、僕はフリーターで、妻は高校教師、2年後に長女が生まれました。僕が子育てをやらざるを得ない状況でしたが、小説家としての修行のエネルギーを子育てに向けると夢がなくなるような不安を覚えました。ところが、長女の子育てを一気に引き受けたことによ



のぼりがはためく「福岡市人権尊重週間」

て思いがけないことが起こりました。僕を書く小説がレベルアップしていったのです。子どもの視点で見ることによって、いろいろな事に気付かされ、小説の中へ反映されたからです。その後、作家デビューをしました。4年間ぐらいは、ほぼ売れない状況でした。この間、次女も生まれ、子育ては依然として続きました。

僕は子どもを保育園へ送った後、仕事に取りかかります。家では、食事づくり・お風呂沸かし・洗濯の3つを同時にやっていました。保育園最後の2年間に作品がベストセラーになりました。子育てにエネルギーをもらって成長できたことは、本当に運がよかったと思います。

今後は...



娘たちが結婚して子育てが一段落。今度は孫育てにまい進したいと思えます。子育てによって自分が鍛えられたことを皆さんに、特に、若い世代に伝えたいと思います。

【参加者の感想】

- ◎ 「人と同じことはしない、でも孤立はしない」というこの言葉、生き方は大事ですね。
- ◎ 固定観念にとらわれない頭のやわらかさを感じました。
- ◎ ポジティブに子育てができたらもっと楽だったろうなと思いました。
- ◎ 子育て体験を大きなエネルギー源として、作家として大成功したバイタリティーに感服しました。



男女関係なく、生きていくための知恵が溢れていました。

「コロナ禍での講演会

人との距離を確保するため、1席ごとに空席をつくりました。皆様ご協力ありがとうございました。



南区人権をこころい

● 令和2年9月16日(水)に開催
● 南市民センター(155人が参加)

白血病から学んだこと
〜生きていくことの喜びを伝えたい〜

講師 ^{おおたに} 大谷 ^{たかこ} 貴子 さん
(全国骨髄バンク推進連絡協議会 顧問)



講演の要旨

あなたがつくったら

大谷さんは、34年前に慢性骨髄性白血病の診断を受けましたが、骨髄移植に成功し、生存率1%から奇跡的に生還されました。その後、日本初の骨髄バンクを設立し、2005年から全国骨髄バンク推進連絡協議会会長、現在は顧問を務めていらっしゃいます。

姉と二人で病気の勉強をしました。米国の骨髄移植という治療の存在を知り、一筋の希望の光を見出します。担当医師に骨髄移植の相談をすると、同じ骨髄液の型の人がいなくてできない

白血病との闘いから学んだこと、「いのちの重み」を伝え、いのちをつないでいく活動について語っていただきました。

私があんたやったら

白血病という病気は、最近では水泳の池江璃花子さんの闘病・復帰が報道されましたが、私の時代は、病名を本人に伝えませんでした。白血病は血液の病気。私は、幸いなことに病名を知りません。姉が「私があんたやったら知りたいと思うから」と知らせてくれたのです。そのおかげで、抗がん剤の辛さに立ち向かい、病気について学ぶことができました。



「幸せは自分の心の中にある」と語る大谷貴子さん

と言われました。姉の型を調べましたが、検査結果は不適合でした。米国には骨髄バンクがあるのに、日本にはない。「あんたがつくったらいいやん」という姉の言葉で、私は必死に骨髄バンク設立の活動を始めました。活動を続けていると、様々な情報が入ってきます。両親と子どもでも骨髄液適合の可能性があると知って、すぐに検査しました。

骨髄バンクの立ち上げ

母の型との適合が判明し、骨髄移植を受けました。その後の大量の抗がん剤による治療は過酷でしたが、最初は自分のためと思っていた骨髄バンクを他の人たちのためにも思うようになり、耐えて頑張りました。退院後、骨髄バンクの立ち上げに参画しました。約30年後、骨髄バンクの言葉は知られ、2万人以上の骨髄液の提供者がいます。この間、移植医療の環境も大きく変化し、がんも告知の時代になりました。医師と患者、両者に必要なものは、コミュニケーション。これが白血病の治療を通じて得た一番大きなことです。

私がつなごう



私は、抗がん剤の副作用で、事前に知らされることなく、閉経していました。ショックで、骨髄バンクの活動から遠ざかろうと思いましたが、その時、一通の手紙が届きます。子どもを残して亡くなるかもしれない母親から、骨髄バンクを一日でも早くという内容でした。私は今、生きています。他の人を見捨て、や

めていいのかと活動を再開しました。移植医療とともに伸びてきたのが、生殖医療です。両者には、全く情報交換がなく、「私がつなごう」と両方の先生方と話を始めました。現在では、大量の抗がん剤治療の開始前、精子や卵子の凍結保存が可能になりました。「がん・生殖」という医療学会も立ち上がり、大きな組織になりました。



新たな願い

私のめいがスキルス性胃がんになり、3カ月半後に亡くなりました。40歳未満の若い世代に対するベッド等購入費や訪問看護師派遣などの公的支援制度のおかげで、家で見とることができました。介護保険対象外の若い世代への支援制度は一部の自治体にはないため、新聞に体験を書きました。様々な所から連絡があり、新たに制度を導入する市も出てきました。

幸せは自分の心の中にある

骨髄バンクは、患者を助けるだけでなく次世代も生み出してくれます。命を救い、人生を救い、家族を救ってくれます。私は、子どもを持つことはできませんでしたが、ささいなことでも幸せを感じ、楽しく暮らしています。「幸せは、自分の心の中にある」ことを、白血病から、そして生きていく中で学びました。

骨髄バンク ドナー登録について

【登録できる方】
○ 提供内容を十分に理解している方
○ 18歳以上、54歳以下で健康な方
○ 体重 男性45kg・女性40kg以上の方
【問い合わせ】
日本骨髄バンク 03-5280-1789



ドナー登録のしおりは南区役所市民相談室の入口にもあります

【参加者の感想】

- ◎ 自分もいつどんな病気になるかわからないが、悲観せず、知りたいことを知り、聞きたいことを聞き聞きます。
- ◎ このところ若い俳優があいついで尊い命を自分で絶った。今日の講演とスライドを見ていたら、思いとどまったかもしれない。
- ◎ 骨髄提供を受けて命をつなげた方が更に新しい命を授かり、親になられたことにとても感動しました。
- ◎ 死に直面するということが、生きるということ、世代をつなげていくということ、知る・知らせるということ、自分ができることを考えていきたい。

わたしたちのパパ、ママは血液のがんでした。

病気を治して戴いた先生、
私たちが誕生するにあたって
様々なご協力を戴いた皆様方

ありがとうございました。

講演使用スライド「私たちのパパ、ママは白血病などの血液がん患者でした」から

【編集後記】

経験のない新型コロナウイルス感染症の脅威に直面し、どう対処すべきか考えるとき、ひとつの拠り所となるのが「人権」という普遍的な文化です。自他の命を敬い、感謝と労い、思いやりを忘れずに日々の生活を送りたいと思います。